

奥日光近世史

奥日光は、明治 4 年（1871 年）の開山後、急速な発展を遂げ、孤立した宗教修行の地から約 50 年で国際的な避暑地へと発展しました。

1871 年（明治 4 年）に宗教上の制限が撤廃され、一般に開放された当時は、寺社以外の建物はほとんどありませんでした。唯一の道は、山の中で修行をする修験者が通る道であった。

徐々にインフラが整備され、奥日光の通年人口が増え始めました。この初期の開発のほとんどは、中禅寺湖の北東岸にある中串地区を中心に行われました。1890 年には電信局が開局し、1898 年には郵便局が開設されました。1902 年には栃木県で初めて公衆電話が設置されました。

交通機関

日光から奥日光へ行く際の第一の難関は華厳溪谷の急登である。宗教的な修行者によって使用される古いトレイルは、最終的にはいろは坂の 2 つの道路になって、連続して拡張されたスイッチバック道路に置き換えられました。最初のスイッチバック道路は、最初にのみ徒歩または馬に乗ってアクセスすることができ、700 以上の階段が含まれていたパスにカットされた。1889 年（明治 22 年）には道が整地され、人力車での移動が一般的になりました。1925 年には再び改良され、自動車の通行が可能になりました。1932 年には、明智平からケーブルカーが開通し、曲がりくねった道の代わりに旅行者が利用できるようになりました。

釣り - 産業と娯楽

人と同じく、奥日光に魚が渡来するようになったのは 1871 年（明治 4 年）以降のことです。奥日光の高地から流れ出る水の主な導水路は華厳の滝で、垂直に近い 97m の落差があるため、魚は上流の奥日光まで泳ぐことができません。そのため、人が介在するまで魚が奥日光の水域に到達することはありませんでした。華厳の滝の下流では早くも 1873 年（明治 6 年）にはイワナが飼育され、1881 年（明治 14 年）には農商務省が華厳の滝のふもとに近い深沢に孵化場を設置しました。

日本にフライフィッシングをもたらしたトーマス・グローバーは、1887 年に初めて奥日光を訪れ、1902 年と 1904 年にはコロラド州からのブルック・トラウトの輸入と放流に資金を提供しました。1886 年には中禅寺湖漁協、1914 年には丸沼トラウトアングリングクラブ、1925 年には東京アングリング & カントリークラブなど、その後も多くの漁協が設立された。

キャプション（右から左

中禅寺街道（現いろは坂）1900 年頃

現在のいろは坂 1 号坂となっている巻道の原型は、明治 22 年（1889 年）に開通し、人力車が使用していた。

中の茶屋

中禅寺坂（現いろは坂）の途中に「中の茶屋」がありました。餅や団子のほか、お茶を飲んで旅の疲れを癒すのが一番の難所であった坂の上半分への登りの前には、この茶屋があった。

1902 年の足尾台風によるストーム被害

暴風雨で記録的な雨が降り、男体山を下る土砂崩れが中禅寺の境内を突き破り、立木観音像が中禅寺湖に流されました。湖面には 6 m の波が押し寄せ、岸辺の家屋が被害を受けた。

戦場ヶ原のフォード自動車

中禅寺道路は 1925 年に乗用車用に拡幅されました。金谷ホテルでは、この戦場ヶ原のように、フォード社製の乗用車を数台導入し、宿泊客のシャトルバスとして利用していました。

山元屋旅館

20 世紀初頭になると、湖畔には「こめや」や「蔦屋旅館」、「レイクサイドホテル」などの豪壮なホテルや旅館が数多く建ち並び、この写真の「山元屋旅館」のように、絵葉書の題材にもなっていました。この写真の山元屋旅館のように、絵葉書の題材にもなったことがある。

湯本温泉でのスキー

1911 年（明治 44 年）に日本にスノウスキーが導入されて以来、湯本温泉ではスキーと温泉を組み合わせで冬休みを過ごすことができるようになりました。クロスカントリースキーのほか、白根山の東斜面ではダウンヒルも楽しめます。